續教格類選

上

特別
イ 4
3163
79(1)

人の言ふ事も世と共にうつり来ていか
きの雅俗の差別の如くやうやうまぎれ紛
歌學例格なとゝいふもの段々に出来ぬ
いにしへは寄よりて文をもて言をまなびたる
ひとこの事なるよりて形を地とする者をあ
ものしいとなりしかるに今の何となく
雅なる人さへひたすらもてはやすもまれに
出来るかれと共に其みちくさのなんの

貴
14
3163
79(1)

[illegible]を初學の人のいひあらはせるは
[illegible]ハいつとなきもの或は古も今も同し
[illegible]ひもて来たる歌古ハ著く[illegible]
[illegible]今は[illegible]ものあるハ雅言
なるもはなはのうあひの外なる俗意をいひ
[illegible]のあ[illegible]と多くく心を用ひされハ
[illegible]くの詞の病を[illegible]
[illegible]ものつ[illegible]ん人々

[illegible]ものを形容をよくまなひ
[illegible]人[illegible]なる[illegible]
引動ぬ[illegible]ものを形ひて
[illegible]人書の[illegible]
書[illegible]と初學の人の[illegible]
[illegible]野へのうつる
物ひ[illegible]の林より[illegible]の葉の
[illegible]事[illegible]の手[illegible]形[illegible]

あるもあらぬ言葉の誤もいとゝ
多くなりぬべきを伊豫の國人卒井法橋
打なゝめてをとゝしの事おとゝしの年
うの比遠鏡こゝろゝして歌格類選二卷板さ
年の夏よりく書くを初學の人さ
学ぶ助とせんとやとあるを書肆の人
乃いとゝやく是をもて真續編をとゝる
まゝくこゝ作の者つの人のいとゝ多ある

ものゝ中にもれ漏しものゝ中にもれ漏しものゝ中にもれ漏しものゝ中にもれ漏し
續奇格類選とゝ名つけ書て
長いとゝを多く岸を形のれを前
集と名づけ三人の角のいとゝ
事もあれども書てをいとゝを
今は此後集のうく なのあるこゝは
初學の人く 古言の書のかゝのを
大のたゝなのこゝ前あるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

嘉永六年の秋

山田春平

續歌格類選巻之上

目録

イ

いか 一　いかも　いつの夏　いつこ

いかく 二　いつち　いつも　いつもろ

いつもを 三　いく　又　いくら

いくそ 四　いくる　いまして

いや 五　いよく　いる

います 六　いゆを　又　今いも

いまそ一ふ 七　いへを　いろく　いろも

ハ

は　八　又　九

ハも　ばや　又

ほり　十

ほり　十一　ほめく

ホ

わよいて

ヘ

ぬ

ト

と　十二　ど

とて　十三　又

と　十四　と

どもむ　十五　又

ところ

ところよ

ぬきこよ

時もなれ　十六　時ともる

ヲ

をこなよ　をり

をやむ

をこ　十七　をこ

カ

か　十八　が

かも　十九　又

かの　廿　又

又　廿一　ぐ

かひ　廿二　多

かて　又　廿三　多て

かそめ　かく

よも　よよ　よよも　廿四　よそ

よそよれ　よすら
(タ)
たれ　又
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
(ソ)
ぞ　又
又　そ
[illegible]　[illegible]
[illegible]　そよ
[illegible]
(ツ)
つる　つれ

[illegible]　[illegible]　廿五
たが　廿六　[illegible]
[illegible]　廿七　[illegible]
[illegible]　廿八
又　又　廿九
そよ　ぞは　三十
[illegible]　[illegible]　三十一
そ　その　三十二
[illegible]　[illegible]

つまよ　三十三　つれ
(ネ)
袖ば　袖をのらそる
(十)
なで　三十四　なで
なぞ　三十五　なぞや
又　三十六　[illegible]
[illegible]　三十七　又
[illegible]　三十八　[illegible]
又　三十九　[illegible]
[illegible]　四十　なが
ながや　四十一　なてよ

いつ

古春　いつまでか春を過すまがうべき花ちるかぜ代へぬ雲

同秋　いつまでか時雨もすまし秋夜そまがふべき紅葉

同春　くれてもとめてもとめれぬ花と柳花の白と雪よりつひぬむ

同夏　夏の池の藤波はいつまでか山ほとゝぎすいつまでか

いつも

金夏　紀の夜よめとれかれ寄いつも初るれとちそすれ

千旅　いつもうつる月の月れけるものやうきはのうつる

新恋　いつもきく袖やくのおとうんまぬれの松を恋

同春　花はあるぬるきハいつも世にとゝ恋の時ハいつ

いつの夜

古夏　いつの夜も月がまぬらん星の山ぞきすがたを鳴るる

後春　いつの夜も夢のうらんまるせれ寄るよ海ぬ夢とそ夜

同　いつの夜ちりそぬらん梅花おもみよのくいろとせつく

新冬　いつの夜空のくきれおろるんそけきハそれあ秋のうせ

いつこ

ドコ

古愁　ちるる時へもくるのきいいつとと高のふるさぬらん

後秋　ちくはるきものとくのいつこそるとよ鳴るちらん

同春　いつこともるれ光をつるよ海こそ地の山い言姫

拾炉　いつこようそ春の月れこえちん行ぬ人のちろし色

いつく

ドコラ

古雑　いつくも世をはいとんうるとせそ山ものよ海へくれ

拾夏　いつくも咲をすしめとと前の中海と捨ようせまし

千冬　いつくも月い光をこもんやちれ行ぬ色

同雑　いつくも手をるれ捨きしとそつもふるる

いつち

ドッチヘ

古夏　五月雨よ拍子ひれい時雨が強くいつちゆくん

同愁　ちるも稀そそこそきこ心をいつちやくハ日すまん

同雑　世をすくふる人や陸そ行きい時いつちゆくん

後炉　もみちそいちるものよ海くるる行やいつちるん

いづ

ドツチガ

古旅　山ちかき花ゆゑ人のたづねいづ　山もかすみてあるらん

後恋　思ひよるなほ嶺の山もたづねいづ　ものいふ声はあるらん

拾賀　いろいろの松ちよの末はいつ久しと思ひのこすもやう

千神　おしなべて雪はふりいづ　みて色いづ　梢の梅あるらん

いつ

ドツチガ

後恋　うつろへきものなほ泡川いつ　ものうらは淺せあるらん

後於冬　降雪いとどつもるいつ　ものうらはつ　ゆまれらん

同恋　思ひ神を秋のゆふぐれいつ　ものうらはつ　ゆまれらん

新夏　夏ものふる雨と秋のふるいつ　ものうらはつ　ゆまれらん

いつを

ドツチヲ

古哀　花もみじ人をいつ　ものうらはつ　ゆまれいつ　をとよ哀

同冬　雪降なほ木ものうらはつ　ゆまれいつ　をとよ

於秋　をとよ　ものうらはつ　ゆまれいつ　をとすきいつれとすてはつ　ゆまれらん

古別　ちひてはつ　ゆまれ人をとはつ　ゆまれ　梅ものうらはつ　ゆまれいつれとをとよふをとれ

いく

後秋　いく代ねて降ものうらはつ　ゆまれ　ちぬへき世の秋きりぬ月数を

拾春　咲ものうらはつ　ゆまれいくら日ねぬ　梅をいろをは人よりはつ　ゆまをとて

千別　ものうらはつ　ゆまれて心をものうらはつ　ゆまれ　衣いくをものうらはつ　ゆまれ　山路ありとも

金夏　大井河いくせうゆまの玉ものうらはつ　ゆまれらんはのうらはつ　ゆまれうらはつ　ゆまの音

又

かる河まて詠ひる

金夏　なのこの月なとのすゝひは思ふ清あいくむすひつ

同冬　はつち島うまちとれ為くあ夜ふいく夜ねさ人ぬ月雪

千雑　やとりする宮屋の家の苔むしろいくよあぬいそ捨まま

新春　いくとせのまよふをつくしきぬ過たれとおもへこすゆの花

いくら

ナニホド

古恋　うゑ玉のつ言ゆつていちるあるあまよいくらも南さしちり色

現在

於賀　まゆ松ゆとうの糸をくりへいくらとり捨をへぬん

同雑　あれまを滝のふ糸をまーていくらゆ玉の抜とるぬん

金恋　うゑ南ーやまとみのまきあいくらゆ人のみをとつむ

いくそ

ナニホド

古物　ゆとよはすちしくせあれいくそそつうしとう思ふ

後雑　ま一思いくそゆよまをくふの間をと待てうん

拾恋　はの南しやたのとみゆいくそゆ人の新をとつん

後於春　ゆとて旅よとう深るうあいくそゆたるとすはるふん

いくど

ドウ

古物　くとうはのふひのまねるあをいつとをは色き

後恋　あきれそと人よをいひてはゆ思ふのとはいくさりて

後拾春　をるもとわそいくとう山梅ふをるさは見ふ新色き

古恋　秋をせる山ゆをゆつうは人のうもいくとそおりよ

いうなる

ドンナ

後別　もゝよもの浜のそこあいいうなる海はこそゆゝしん

拾恋　恋ゝさいい海は出てもこえるぬいうなる時にもゝしもむ

同雑　まを刈ゝこゝるゝ芦田鶴のいうなるゝ浜ゝもむん

新秋　むすゝ雲やゆゝも秋のそゝる風いうなる風のまゝ吹ん

いうゝて

ドウゾシテ

後恋　猪のゝ見ハいうゝて回しゝるゝ人をゝゝ

同　いうゝてゝ見てゝゝゝ人待ゝて来ゝゝん

同　いうゝてゝゝゝゝゝゝ時ゝるゝけきゝ妹ゝるゝ

いや

イヨノヽ

古恋　森ゝ夜の夏をゝゝ国ゝゝゝゝ妹ゝゝ

同　河逆ゝゝ雲井をゝゝゝゝ月のゝゝゝゝ

後恋　ゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾恋　ゝゝ恋ハ牡ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いよゝ

古雑　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

詞恋　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新葉雑　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玉雑　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いく

キツウ

古春　山ちかくすまぬ梅もいくるひそ枝へとやどもウグ

同秋　きりくすいくるきて秋風の引き過ぬ枝をもとはん

同　ふる雪の時雨しいくもあらぬ雪のこしいろ付くるイメワイ

同雜　うゝまはとゝぬものとしひてこいくもしるキツウトレガヨツメ

いな

イヤ

古詞　なもくもおもくとのくしふるとはいるやヨツメ過りなるフヘイかイ

同東　ゝれ所のうもはうるふるはのいるよハ所さいの月うるシャ

於恋　めゝもれは前をいるやのいまふやまさをるめやヤウカイ

同雜　いるとしいるよ秋のぬるとしハ物思ひいるとへるれヤウキレヌ

いまぶ

古春　梅ゝるまるる景ゝるみてるもいるこ雪ハ降りくシテ

同夏　ゝまるるきいるこ藤るる花橘はやゝるるもイテ

同秋　神を月時思いるぬるるようているふ花のひの森ルガヨイ

物春　まれもくの梅ゝるいるくるふ松原ゝ深雪ハ降

いまハ

今デハ

古哀　景雲の山をまいるをすゝ深の衣の袖ゝ涙もあるデ住カヌキニヤ

同恋　ゝみゝるるハ所れもゝるハ恋ゝ涙もあ命地とデカメキニヤイナラレヤ

同述　雜恋るるゝの梅もいるもるゝ身とのはと一もニアツメニヤヤウブ

後冬　ふる雪降ぬまゝ深ゝ雪ハ降ぬまゝ深ゝちよ人もよんワタニヨツテガテデハヌ

又

サラバ

古秋　いはねとそ見る時ハ河原なる紅葉ぬるる

同恋　なみぬとそいるるもれぬ人ぬ見ぬ人

後恋　くやくと袖ぬ濡るるとなるいとる時を

千恋　おもひぬ見ぬ月もいはねの元

いはねとや

古恋　いはねとやもひを海とをとめて金ぬ

後恋　いはねとやおもみぬ一きふ義のつかまとるば

同恋　ふいとやふをとそ時ぬ人ぬ我よきとせよ

新勅　いはねとやもひつるせば時ぬ人ぬのを月末ぬ

いはねとや

古恋　かとそ恋ぬ一きとし」人まん里をいれとよへり色

後恋　かとそ恋ぬるおの時ハ君をもひちよぬとしハ

千秋　かとそ恋ぬ白のハまみちぬとちぬ君ぬ

新恋　かとそ恋ぬ思ひ出よと頼りハ月まんとそ恋ぬ

今デ知メ

いへ月と

古春　花そのうやへよりん梅花を毎ぬて富つとせん

後春　ふめの色を花そこハをぬる紅ぬ色ふつせ富つとせん

於雜恋　いへつとるなるとなるとぬ紅ぬ色ふつ

新勅釈　ちりくよ紅ぬのうぬ紅ぬを富つとして

いろ〳〵

於秋　いろ〳〵に花ちるがごとくなる大井河下ふく風やあらん

後於秋　いろ〳〵に花ちるの里とゆくれなゐなるもみぢのあとぞなる

同賀　いろ〳〵よ千ぞたくさんちとせ経るふかくの原よ鶴やもれぬる

詞冬　いろ〳〵よとそもじる時るよみちとひとをひとてちとてぐり

いろもこも

古春　春ごとに誰ぞうせもし梅花いろも香る人を知る

同哀　いろもこも昔のちよるとも人のけをえしき

於春　ふぬの妹こ春よ梅の花いろもこもつぶ

新雜　梅花何なんうる人のいろもこも忘ぬ世を

は

古詠　まつ柳をこ春よりて雪ぬ花ぬ梅の花ぬ

於春　何ぞのこしこ春る何ぞ春ものはるひすれ

後雜　世をとそもく苔の衣はこ春一夜ぞ春ぬ

於雜　時ぬ山ぬ思ふしの○思かのとぼそよ雪ぬ

とより安房

又

古哀　うたゝよ我と忘ぬ夢ぬ夢はやぬ

後友　ふるさとは天のはてと七夕後のこゝを指よはせよ

閑　晦日

勅旅　こゝ里はたゝる山の峰ぬ雲ぬ

落方　おもひよは大空ぬ雲ぬ

はも

八十ア

古恋　まるはてれ雪をとみておひせ春ふ花ゆるうえ君ハも

同雑　毎の春よなつひ雪れ花れと雪こ春ちち月ふうハも

同歌　あうきれそうのやうな妹とうれと祈その新けの雪れふうハも

ばや

ニヨツテ云ヽカ

古秋　なれれのあるを移ゆ月せくやるうふめれ紅ゆ雁ゆまう

同　ゆううの月のうも秋ゆれはみちすれはやてうふうん

同恋　夕されは望ゆりけよりみとも光ふゆはやへのつを花

後恋　汐うふぬ海とまけはやよふふもふめるしてまのへぬん

又

ナラバ云ヽカ

古秋　心ひてよとうはやれん神雲れおきるふ雲原ふ雲れ花

千恋　れるあよ言れれ秋ゆちそぬひうはやへよ花き

続後春　紅ゆ尺れよふゆ梅花いうゆむ見ふうを

儀物語　秋のれちよを一夜よあうふやちよ春ゆの時ぬん

はや

早ウ

古恋　あん世ゆもやあんめ風ふつ風紀へを若とかりん

後春　梅ひきあ菜もつる波咸ぬるをいて梅ゆもさるん

同恋　雪の雪ふやあるあよ石上雪ふ春もおうふへく

擬愛　うのふやふ紅ふ世よ時る月ふ時月へふうん

ちはや

早ウ

後恋　大時雨ふるとはしたれ和のそやもしら人よ所しらそなる

同雑　うれなくうらの海をとゝのふ浦もなく異ひなん

子雑　天のうすあふらきハ雲まてそなくも風はへれる

新恋　たそ所なせの川の浪れそやくもとしれかるる

又

コノウチ　早ウカラ

古恋　よ世の君はなくれ人をなひてあてた

同　よ世のよやへてそめくれてふハ見れ

後恋　あまそのうの船をこ人のうの船をあまりすと言きもはまぬる

後拾雑　ちはやくるしら山井のあれ所れうちみ海ハそ色行

ちはの

カスカニ

古恋　まる世ちはやるみてもい出まるるはなつかるこそ君ハも

同　初雪のちはやをもをうしはまるのくはかまるる

後夏　時雨ちはやるるをもをあてはぬれなめれ

新恋　おく山のちはやる初雪はなつかるはまそそうみん

ちるく

於雑賀　ちるくと雲あるとしてはあ世ハ末をくなもるる

後拾春　ちるくハ八重の沙漠よおく風をあ山のハあこ行

千旅　ちるくはあれはとは紅ゆく宿の杉を重ちるあ

同雑　ちるくとかまくのはをとを宿せはあるあ海ふ登れ物舟

ヨソ

古春　うゑしかすき山里は花ちるあとは海をさかり

同夏　ほとゝぎすきこえぬ山をおよぶをとゝ人やりをぬ

後於春　夏の月ゆふすゝしき楊花ちるもちりはてゝ見ず

夕夏　君百年清めを高よせ紙おりををつる

ヲレヤの

古京　山桜霞の百ちりのまとそ人をしらしらを

後秋　秋の野はなをゆふ吹あるのゆふ月の名

拾夏　ちのゝをゆふ吹きゆふ原山をとゝはなつゆ

後拾遺　ちのゝをも野てゆるをあるをゆるを

アシ手ヤトヒ

古雑　ゆのをれをさをそしてゝ世のををおもひをゆれぬ

同　世のゝきめゝをえぬ山海をつひをを見ゝ人をゆをしゝれ

後春　山ゝ野はゝ花のゝゝゝ林はゝをゝれをゝをゝゆる

金意　ゝゝ風はゝ弱のつ風ゝく見つゝ見ゝをまゝゝれ

ものめく

金秋　をぬゝをゝ桜やゝゝぬ本のゝゝゝものめく秋の月頃ゝ

千夏　つゝをゝをしゝをつゝ月をゝものめくゝのゝゝ白の元

續哀　河のゝと我ゝゝくゝんゝゝゝのものめゝゝゝ海世ゝ

源家木　秋ゝゝゝ世ゝのゝゝきゝ志の為ゝものめゝゝをゝみをゝ

おもてへ

オモテヘダレテ

古秋　秋の田もるの苫屋の苫をあらみ　おもてへだれて　まれ紅葉ん

同　彩すき秋を　表へだれて　人まれ　多

風秋　朝毒れ　おなつるきよ　秋の田　苫屋　露

家隆集　ちもれつのみ　河　山　露　秋　来

ぬ

古春　ぬれのやすへ　ぬ　梅花　のそ　ぬ　梅

同　いつまてゆへ　ぬ　花　ぬ　紅

同　沖へ　ぬ　ぬ　沖の波の上　ぬ　ぬ

後春　梅　ぬ　ぬ　梅川波の花　ぬ

と

ものの意　トモ　トテモ

重之　ぬき　ぬ　ぬ

秋之　ぬ　人　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

詞林記　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

堀川後百　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　花の姿　ぬ

ど

後恋　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

秋賀　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

貫之集　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

とや

トヽ云ヽカ　トテ云ヽカ

古春　[illegible]

同秋　[illegible]

拾遺　[illegible]

千賀　[illegible]

又

トカ　トテカ

後拾遺　[illegible]

金秋　[illegible]

詞春　[illegible]

千雜　[illegible]

とても

ドウデモ

新雜　世中をそもうてもなほ同しこゝろやもつてあれば

同　[illegible]

拾遺　[illegible]

千集　世の中よりなほ人よりぬ[illegible]

とめて

トヽメテ

新春　[illegible]

同　[illegible]

同旅　[illegible]

同雜　[illegible]

又

タヅるテ

古春　誰しらまあておつる春雨とくるむ山のちくさを

同賀　うゑの屋の山の男松とまあて落る滝の糸の式の数ども

拾春　春雨とまあて誰とくるしん梅花あやめ春雨くるくして

新夏　ちくさ寸形梅のうとまあくるくハ苔れ人や恋しき

ハヤウ

古春　梅花ちぬるかなを寸人の形を色も吹ぬ

拾恋　人とくるくちくさ川こゑはの玉れまハらハぬ相ま可ら

後秋　ちくさよのさ川系のうれりくるやふのうれを行ん

同恋　ふずハくるれ行の姫ちくさ夜ハ形れとかなゆるる

古春　くれ間よまちを春雨一とせをちくさいくしやくん

同冬　秋玉のふの形よるちくさ山ゆきも引みれ姫ふ行り

後冬　いくくさ山の梅ふ(ふ)のさるふ春を行ん

拾春　ちる春ふちるとれを玉のくハ海ちまるくを

古春　花春　ちくさ名ふくれ梅花ちくれるくをまちを

同秋　数ふもくちくを一年内ニ花ふ春ふは

後秋　天河とるきりちくれる春ゆるを(ふ)ふまて

千春　ふる人のちくふるふ梅花いくしねくふちくん

しさろ

古春　桜ちる花のところハさるかゝ雲ゝきてよすがら

同雑　色ゝなれと和もさゝぬ雲ハ世を捨てかゝるたゝ多

同　姿里をゝ[illegible]あ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

後拾秋　秋もゝのきゝ[illegible]ゝ月ゝ月ゝゝゝゝゝ

とぐろ

ドンドヽ

古夏　五月雨の空もとゝろ[illegible]

金葉　[illegible]

兼盛集　[illegible]

とよむ

ナリヒヾク

古恋　[illegible]

同物　[illegible]

後拾雑　[illegible]

とりのへぢ

ソノヘヽ　トリモナホサズ

古旅　[illegible]

同　[illegible]

續後夏　[illegible]

忠家集　[illegible]

とはとぞる

常フダン

金秋　ゝとはゝ夕れのもるれと秋之ひらそすしうれ

新勅秋　の野ゝきすゝ森之のゝゝゝ別て林ゝ哀つ声

同雑　うゝと山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同釈　ゝしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝきゝ

万代フエキ

拾賀　山科のやゝ山ゝ岩根ゝ松ゝ高ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新賀　ゝゝゝ代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

定家集　石上ゝゝの神杉ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

時モアラウノニ

古哀　時ゝゝゝゝ秋やゝ人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後春　時ゝゝゝゝ花の盛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

千秋　時ゝゝゝゝ秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新春　時ゝゝゝゝ春のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

イツトモナク

古哀　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾哀　河ゝの山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

特撰秋　山田ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

ヲヽアヽ思フコレヤ

古旅　[illegible]

同　[illegible]

後秋　[illegible]

新恋　[illegible]

[illegible]

トキ

後恋　[illegible]

拾恋　[illegible]

拾春　[illegible]

雑　山里の栞[illegible]

[illegible]

イツヽデモ　セツセツ

古夏　[illegible]

同恋　[illegible]

同雑　[illegible]

後夏　[illegible]

[illegible]

ヨリモ　アラウノニ

後拾春　[illegible]

千夏　[illegible]

と

小晴

後恋　とやせすゐ白さへ雨はほのぼのあらんかもゆるる
後拾遺　白雨のとめむしらくもぬるよりこのし新しらけ
重友　ひとすぢ雨降るまゝ雨するとやこゝろせよ月白雨
新春　雪白のとなほ雪のとやせ白かつる用よりそなる

ち

トコロ

古雜　ちぎの上ひとつさめぬ壁の外ハゆくて高ぬ山へちこ
同　ちよ紅山の白ちらすかぶるる世のし紅のつれなせん
後恋　里毎ゆ時をひれをますすちぬぬるつぬとて
拾春　ちるれぬるひのつぬひるめちるとくよ壁つ

ぬ

古哀　ぬるちるとのらやハ暮いんるる紀せも沈ふ紅
同秋　萩ちる花ちるん小せの表ちるぬもそれん小波ハふも
後賀　ちる名年ちるとるを我ハ少ちる月ぬあちるそあ名
同哀　ちらよと少ちる中ちるあきハ人のるらつまやぬん

又

古誹　ちちちよ高人ちるのちのそれちやちお波をちるそちぬ
拾春　ちちやちの柳のちれやちちんかもひのおよ高ちる来ませち
同雜恋　我そハよちち所ぬちやのちとちよし高ちきちさぬ

又

さとなら

古恋　うつまさもとて河辺葦まさ人めを分とるひさ

後春　をせをとよ行てを花のちるあ命さくるかしこ

同雑　あるき本よりもるえ行相を毛を病をふるさ

うも

カナ

古雑　月は原をを原の高くしく風の引きむは岩らも

同歌　哀やひかりれせぬ梯系の高ゆへき神のきもも

拾遠　こ風をの浦のを風ゆまを一るるい思と毎ふ祭も

同哀　ひまつ原を河辺祓を家ぬのるふしほきてあるを云も

うく

カウ

古恋　世の中ハうを河れ次をのめよ人をひしり色

同　くをんものとハ我も思ひすきるれ花ほしり系

同　ををよりもをを中をを色をれいをくれのををは

後秋　さひくをんを思夕れを棚をつあるを河辺

うくしの

カウレナガラ

古賀　うくしのをををををををを云ちやちをを河辺をと れ

同雑　くーの世をや春ん立の原上をしをる松系ない

後餞別　くしのなくの人をを未ぬ我を選んをハつを

千旅　くーの河辺ををん菩生のかをひーを系を我を

う

カヤウナ

後恋　白雲とぬれもてぬれもてぬれ袖うるふちとしらるぬやなそ

拾恋　玉鉾の道のしるべしてうるふ事はまさかきのすゑ

同雑　大井川うるふ人の棹さしてうるふ世をやわたりしにし

後拾雑　うるふ事はいなくるを思ひとうるふ二葉の松まそ人ぬき

う の

アノ

古物　うのかたよりつるをつるかたんぬ波ハ何も情ちるをそ

後雑　いそのかたのしらなみ数もあれなる宿を松てる月

拾遺　うのかたよりいでしを時ちるをうちと人よりしん

同物　うの河よりもるきるをてあるをはるをそ

う

方角

古炉　秋の野をもるをしぬ松をの葉ノすゑをうの方ゆ

同恋　小宮の袖のうきをうの方ゆ野をもとをもとをうの

同　うをもるをいでもいんうの方かゆかいをるをみをのして

同　雪をは松をあんをもるをいをは掃ををうをむ

キハ

又

後夏　夏をうをもるをき松ハ方の酒のうをきをれをるをを

同　松をの花をうををはををちををるをらし

千旅　いつもををの月れをけをさハものやをきは歴の雲ち

さみ

古春　梅の香を袖にうつしてとめそはまほしきもうつりみの風

同　桜いろの衣をうつすきもの花のちりぬる後のうつりみよ

同秋　やとやどる人のうつりの菊の露をすまもとめ給ひて

同別　ぬれてうつる袖の白玉をこそはみてうつりてそゆく

又

タガヒニ

後春　君のゆくすゑを引とめ我もうつりみをつまんとうつるを

後於恋　ちぎりきれうつりみよ袖をうつりゆくまの松風はうつりは

拾恋　なるとうつりいてうつりみよ君をうつりてぬるまあせむ

新別　うつるものよやうつりうつるうつりみよ月新

ひ

古雑　河原の山のやまにかかりて紅葉はかりをもとめ

後春　ふる雪のしたにかくれてうるはしの白の梅のはつ花

同　高ちく梅ちくはなびくはるのこまもとれ

同恋　いとのの海のふかの海はかりをもとめ給ひ

ぐて

カハリ

ニクウ

古春　桜ちる花のうつろひにくるるくれなゐ雪をかりてきてにくうすは

同　うつろひにけるはつ孫波をうつしてにくうのうつりん

同妹　秋きぬの下紅葉のうつりはやうつりかはりの人のまねにくうする

同雑　うき世をつうつりもうつるうつりにくうすは

名

フリ

古恋　たひなあひて相見ぬ沢のうれやよやる日さへぬるるふる
後恋　る時はるさもるくしぬ袖をるつるる恋きやるそ
拾雑恋　人をもぬ人はるるゆあふ涙よめりるそるるん
千恋　おつるくるの雪れ人乱やりるをのそをこそるる

名て

心ニカケテ

古恋　ぬるるぬきてるるるる衣みてなるぬ時の雪るる
同哀　るき人の宿るるくく時るみてるるのるるるみるん
後恋　あ涙の住世の形移みてのく思ひるると知人のる紀
同夏　ひるるやそ氏人のむるるみてそるひるふれを

又

古旅　月れ風ハ十時るけてうきぬと人よハみよ海人の物るる
新雑　はは雪まるるるし紅はる時みて涙をよるる春
拾夏　涼山いてまるやまるる時るるきみて声の雪ゆ春
古春　梅るるまるる雪るるみてるるるる雪ハ涙て

名

後春　雪のひるる時て桜のるひるるる山桜のるる
拾冬　かるひる妹るりゆ島るみ波の河風さひるる時雪
同雑　秋るるし恋る人のるるるるよを永月とるるやるる

う

古恋　見る夜を待ちてハ河瀬の山桜の咲ぬ風し
拾春　咲ぬ間ハ行てもとまて見ん山の桜ちるハ名
同恋　夜一まとあるまてすゝ也ハ海ゝまても寄もけるう
新冬　時雨の雨色まる〳〵ぬるハ桜の葉も年ひまて見ぬ色

うゝめ

古哀　雉子の尾ゝて花山田うゝあよ〻ゝ花よの中とかひ名う南
同　うゝめの花ひ詠とて見ぬ事ハ行のうゝ色
同雑　雉子ゝ生ゝる玉藻とうゝめの行ゝて抽ぬ成ぬ
後松別　うゝめのあとおもとゝ河のせきとめぬを洞る名

え

古別　下の帯の色〻双方へ流ゝるもゆきめぐりてもあんとそ思ふ
千旅　行ゝ人ハ〻〻双方へ流ゝるも洞とよもとめてしうる
新恋　流ゝ引ゝ行やめゝ行ぬ〻やハみんと思ひ
同　吉柳の糸ハ〻〻双方へあひ〻ゝ思ひあてん後ハうゝし

おゝ

イサヽカ

後恋　行ひゝゝゝ

よも

ヨモヤ

後拾雑　うつるきを待さくらよりもあるてハやゆみ里

千恋　誰もよも問さすゝ君の云よのこゝをとゝもられ

新恋　伊のいとよもあゝしまやハるいのちなるゝき

同　いきてよもなのよて人ハつらしき君れとゝくゝし

よよ

世中デハバン

後恋　さら浪まゝ立めゝ浦とゝ世ハ厚しも高れあ

拾雑賀　岩のしのはよゝんゝ忘ゝも世ハ稀ゝる稀ゝを見ハ

後拾雑　夜をゝあゝとゝの空をいゝるゝも世ハ重塩の言ハゆゝし

貫之集　ゝまゝるあゝすれも無月の山のゝハよゝらゝ古ゝ

よゝもよ

古恋　よゝもよあれてゝゝ川泪川みゝも落ぬゝるゝゝ袖

後恋　よゝもよゝテモ逢ゝ云ゝ海川の遠れは底るゝけゝゝぬゝゝき

同雑　よゝもよゝテモ峰へふゝもゝ人ゝのゝゝ我ゝゝ頃ゝ

同　よゝもよゝテモ見ゝぬゝ長ゝ和ハゝる涙のきすゝゝ

よゝて

外

古春　よゝかゝて鶯人ゝゝゝの花ゝゝ枝ゝゝ

同賀　秋ゝれゝゝゝゝぬゝきハゝのゝゝを見ゝ原

同恋　天雲のよゝかゝも人のゝゝゝかゝゝゝゝ

同雑　ゝるゝき君よハゝもよゝゝれゝ哭ゝゝ

よそのゝ

ヨソデバツカリ

古春　よそのみ花ちるそめ梅花あぬいろをおてこそ見し

同別　よそのみさひやるへくもあらぬ身をうかんふしの雪をうへくもあらぬ身を

同恋　よそのゝ恋ぬるかなまこもかれぬ

拾恋　よそのゝ恋やはさひんれるの赤花のいろ也めぬ

よすゝ

ヨドホシ

後立　うゝの葉をもを秋の風すゝおもひつるれ

後於秋　古里を浅茅ヶ原と成ぬるよすゝ出るをのこそ

秋立　涙のゝうきぬ人の袖棹の影きよすゝ高ねをぬる

古恋　高をすつきをしゝるむのゝ月ハすゝよ高ゝ

よすゝあて

ヨノウチニ　マダ夜ブカニ

後拾恋　よすゝあて帰る雁をあてこそ聞ゝ鳴ぬ月

同雑　よすゝあてとりぬ雪をあてこそ聞ゝ鳴ぬ月

詞恋　世のゝ玉ぬく玉ぬく玉ぬく玉ぬく

よひく

古恋　人をもぬ雪をよひちよ雪をたをゝちも春のん

秋恋　雪をよ雪をよひ雪をたをゝちも春のん

同　心ぬ人をもぬ人をもぬ人をもぬ人をもぬ

同　よひく雪をよひ雪をよひ人をもぬ人をもぬ

角色

ダレ

古春　雪の右よりいつ[illegible]ハ[illegible]ハ誰[illegible]

同　[illegible]て誰[illegible]せむ梅の[illegible]

同　[illegible]ちんせのやう[illegible]誰[illegible]ハ[illegible]

同秋　[illegible]ちくつ[illegible]誰[illegible]

又　外ノ人

古恋　[illegible]誰の[illegible]

後夏　[illegible]人ハ誰[illegible]

拾恋　[illegible]誰[illegible]

トゞ

ダレカ

古春　[illegible]

同秋　秋風[illegible]

同　[illegible]

同恋　いつ[illegible]

ギキ

古恋　[illegible]誰[illegible]

後春　[illegible]

拾物　[illegible]

海さうな　タヽ人ニ

後拾遠　海さうな所なく波の寄るをよそとるさはぬそひけりなる
重之　海さうな所なくハ見れさらしてもなをうらしてあるそも
同　海さうな浜の立る浦くハのるあれひうなるつまの
詞春　海さうなる波立らるを見ひすれ神なるとなやれくやきくん

よそ　便宜

古春　立ちなれと風のしるきをよそとてを雲さきをハやな
同　山浜の所なるきをよそ所なるをしるせそはしより所なるへし所
後春　とをなて花のしるをよそとくいとなるをやうるをん
同雑　人よつくをしるきをよそ大所きれ表のしるをよそ所なるれハ

しのもり　心メノミナ

拾賀　姫鳥なるのもり紀なるすの山あを紀去の稜を見は
後於賀　一本の松乃末をそよもり紀なるをもり代をはを
千恋　紫末しをなるをよもり紀つきをやうるをとなるハ
新雑　しのもり紀中の五人のうを花付をる月を所をるも

あし　例

古賀　いをくをるなるきあ紀ハ高をもちをせのあ見ハをあん
後恋　高をして紀なをるをハ海をる紀と世のあをよをなをきうを
拾春　をらすか中を亜をふ松のあをせはを代のあをなと立海
新雑　神代をハなをやをを横紀をの所ををををるあをは

さゞりく

サゞりく

後雜　きそのひとりをもたえてんうき世の中よ何をたのみも

同　望月の駒よりおそく出てはさゞりを山をもえ分

同恋　高瀬のくるを人のみるとてもうつるてんん

同　れぬとて海そなへをもかるふねをもとる

ちぎれく

チギレく

後於秋　明なるゝ川淵の雲ちぎれよ雁の袖のかはは

同立　おもひそれみひとめのゝえよりかたのさらの袖を

千春　よせ山をたをるとなるちるを見ぬ時のふ中

同冬　朝ゆくけふの河霧ちぎれよかれたる雲

ゆく

ユク

金恋　おもひをもとまるとはまるとはまるとは

又

玉春　[illegible]

同雑　[illegible]

千五百番哥合　[illegible]

又

古雑　[illegible]

後恋　[illegible]

後拾恋　[illegible]

新勅恋　[illegible]

又

拾別　[illegible]

千秋　[illegible]

同雑　[illegible]

新雑　[illegible]

又

古旅　[illegible]

拾春　[illegible]

金意　[illegible]

て

ソレ

古恋　[illegible]

後於雑　[illegible]

千哀　[illegible]

新春　[illegible]

そよ

ソレヨ

古憑　[illegible]

後於恋　[illegible]

同　[illegible]

詞冬　[illegible]

そなた

ソチラ

後於恋　東路のしの[illegible]

詞別　[illegible]

同雑　[illegible]

新雑　[illegible]

そとも

ソトツラ

重秋　[illegible]

玉夏　[illegible]

同雑　[illegible]

慈鎮集　[illegible]

そよ

チウデ

後恋　君を思ふ後ぞきいはれ夜よいつもとなるとうるさ
同　うるむもちもいう雪井ちるなきくとそよ紅き
拾妹　見わたるかぎりなれそなれこのそよ紅てもうへちるも
千雑　山里の紫とりくよ立ちうりくれるとそよ立るる

そこ

ドコ

古春　おもちち春の山道よおもれそこそきそぬ猿鳴てち
後於雑　紅拾ひ所のそこそしあらしめりれやめとくせくも
續恋　行るくおれ系濃ちるをはそこそきえぬ星の絶る
新千春　月新のそれ降よ桜花をしともいくえそれぬ

その

古俳　行その名のそもれそむ我名そうそ
後雑　皆人よぬこそをれあ世所そのやりそそ八侍れ
拾哀　常ぬ世そ紅そ紅それその移るよ降ちよ八
詞春　浜山本のその格もこそ法し桜をれよ降れよ名

そのうち

ソノ昔　ソノトキ

後於春　志あゆひそのうそは桜花をつやそ八ち軍
同恋　柳ちやゆてちしそのうそおくてるち侍る
同雑　そのうそ人八侍し前の桜それ侍ち色
新恋　いそへのちひと人そそ桜のうれふそ立もぬ

つし

後冬　みちくさ時雨もすしられまくゆく人とりやとめぬ

同恋　世の中はたゆる船の月なるて つるよもとゝぬつしれ

同　君よはしつてつきそつきれのうらはもとの命やは

古秋　駒ゝもひちゝそつき棚機のとよ年一度ひはもつ

つれるき

後秋　ものあ年君をつたゆ秋せハるり以ぬるるもの

拾恋　いるせむ命をゆ恋のとひはすもに人ハつるす

古恋　つるる紀をいの命を忘ーるるるさるるる限ら

同　つるる紀人をるて山れのるへるやてるみきつる

つるる

古意　人をぬおもひをつるるするる原ぬの山をる見これ

同　るるる原波の浦の白波はつるるり住るるるる恋

後春　ゆるるあるるるるるとそるりきる紅とるくのかひるる

同意　絵るるるるるるとるるるるるるるるるるるるる

れく

フダン

ミノサビシ

古意　れくの水面るる限川祝のくぬてゆるるるり

後夏　れくるるるるるるるるるるるるるるるるるる

千春　れくるる限ハ限の白るるるるるるるるるるる人のるるん

後於春　おもひやもるるるるるるるるるるるるるるれく

神ば

ヌノニ

古秋　天の川清せさらぬとしなれはぬのにはたてしやわいなる

新春　まき山の松原もいましらすぬのにはたてしやはるかすみ

萬葉八　秋ぎくいくらもあるはぬのにはたてしやはるの朝けの露

神ものをなく

古意　なくなく時ぬれはせ田鶴のおもひくれくるものをなる

同　今夏とひくぬれしの袖をなひくなく

後夏　何事ぞとぬれしきすらんぬれとなるとなるものをなく

拾雜　なるとなるとなるとなるとなるものをなく

なで

シヘハヌニ

古意　うめの花ちるを庭とはなてはなてはなてはなるなる

後雜　ひとのきてはなれはなるのかはなるのなるなる

拾雜　なるせをゆきてはなてはなてはなるなるはなのかはなれ

新冬　なるなるはなるなるはなるなるはなるなるはなるなる

など

ナゼニ

古夏　ゼなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる

同意　なるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる

同　なるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる

後意　なるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなるなる

なごて

ナンデ

拾意　朝ぼらけ[ケ]ほのぼのとあけ[ケ]ぬるまの[イ]ほとゝぎすうわ[ワ]の空になんて[ンデ]なつる袖[デ]なるらん[ウ]

後拾哀　なんで[ンデ]そう[ウ]ぼうこう[レ]ぶらぶらこん[ブラブラコン]ろくろのとろくすめば月も行く世[ジ]

兼盛集　まつ[ド]ぶけのみもとゆ[ヤ]ゆしくなんで[ンデ]ゆ[ヤ]ゆしくぬるいつ[デ]ゆうるん[ニアラウヅ]

伊勢集　きは[ガ]の雲をなんで[ンデ]ながれ[ルーキャ]ぬるとなんで[ンデ]ながるるのもしらん[ニアラウヅ]

なとち

ナンデ

古意　秋の田のなぎ[チ]ぬとなんで[ンデ]ばせ[ハセネド]ぬるかりほもなれ[シヤウヅイ]ばもせじ

同雑　あぬ[タ]なんで[ンデ]ぬるとせ[イタテアラウヅ]ばかいばかりふよう[レウ]ぬ[イ]

同　ゐ[ヲ]ぬ世をつ[ラ]ゆ[イタ]ゆ[ヤ]ゆしくなんで[ンニ]ぬ[ノニ]ぬ[ニ]ぬ[ニ]れいてなんで[ニテラ]ぬ[ブ]

後意　傳[ヲ]ぬ[ヲ]の[ノ]の[ノ]篠原[ハラ]なんで[ンデ]ぬ[ク]ぬ[ヌ]ぬ[ヌ]ぬ[ヌ

あそもく

ナゼニカウ

古歌　うゑしたゝるゐぬるゝ井なるゝ泥のかゝるゝ泥の川よりなれてかゝん

同雜　いくゝとかゝるゝ泥のかゝるゝ泥のかゝるゝ泥のかゝるゝ泥

伊勢集　あなたのかゝるゝ泥のかゝるゝ泥のかゝるゝ泥のかゝるゝ泥

重之　あそもくゝ泥のかゝるゝ泥のかゝるゝ泥のかゝるゝ泥

何

ナゼ

古奉　なぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞ

同秋　なぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞ

同雜　なぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞ

後奉　なぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞなぜ何ぞ

又

古秋　何人ぞ何人ぞ何人ぞ何人ぞ何人ぞ何人ぞ何人ぞ何人ぞ何人ぞ

同別　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

詞意　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

新秋　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

何ゝ

ナンデ

古奉　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

同別　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

同恋　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

同雜　何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ何ぞ

何は

古夏　ナンデ

[illegible]

同物

[illegible]

後春

[illegible]

同秋

[illegible]

何しら

古恋　ナンデ

[illegible]

同

[illegible]

後雑

[illegible]

素性集

[illegible]

何を

古夏

五月雨の[illegible]

同恋

[illegible]

後恋

[illegible]

拾夏

[illegible]

又

古春　ナンデ

[illegible]

後雑

[illegible]

新勅撰

[illegible]

接き

山の[illegible]

何ゝ

古雜　はしきやしこのよつまもしの衣袂ゆたりといふ命を

同俳　雖波ゐるあまの袂はつるしゐをたれとゐるとへむ

後恋　いそしき我人よもとゐん時のつゆぬるれやなみの袖

新哀　かくとそ為もつゐをとそるてゐるとへん

又

ナニヽヽ　ナンデ

古恋　ひとゝはをすれるせゐ何ゐあてゐるとへむ

後恋　あまのとそ袂ゐ系そ知るゐ海のとそゐ何ゐより

同　あくるもひるゐ色世の中ゐ何ゐやおもゐあん

同　ハをもるとそ何てつとゐ何ゐやおもゐとそ

何せん

ドウセウ

拾恋　何せんゐ抜ひあるん岩代の松を見すき抱とゐる

同　何せんゐ命をけてちひゐむいとゐやゐ見とゐ何ゐ

金恋　何せんゐおもひみゐむ夜ひしきゐハゐんとゐ海を

拾恋　きひゐむ後ハ何せんゐけふられ為をゐ人をゐ海ゐ

何そは

ナニヅイ

古別　ゐつゐ山何そはゐつゐあひ来ても海ゐ海ゐ

同恋　いのちやハ何そは夜の何ゐあとゐゐつはをゐゐよ

同俳　海ゐるれと何そはゐくゐるやれ新ゐ海ゐとゐ何ゐ

何とかの

ナニトナウ

金冬　何とかなくなくなれとなれゆくよまをまつる

千雜　何とかなくなるもの神のなるぬ八月のなくれ春やかくもむ

新雜　何とかなくきけ男涙をもぬる芝の袖よりしぼり

風秋　何とかなくなくなる山田のなれるきる秋をまつうつる

ふるさと

ナサニ

古恋　秋世のなれなる春を咲花のなるやもいんかやまとなる

同俳　枕をかなるより意のせあれなせんしるを春ゆまとる

後秋　あるなるきる人あるやなるなるなるなるなるなる

新雜　芝のなれあるれ塔やきいとなるなるなるなるなる

又

ツウレイ

古恋　なるなるの姫なる河の底の春流れなるなるなるなるなるは

後慰　人なるなるなるぬるなる雅なるなる芝なるのなるなるなる

金秋　なるなるなれ芝の春をいなるなるなるなるなるなる

兼輔集　なるなるれ人なるなるなるなるなるなる

ふるさと

ナイノニ

後夏　姫なるなる空なるなるなるなるなる

同恋　人なるなるなるなるなるなるなるなるなる

拾雜　おもなるなるなるなるなるなるなるなる

同恋　なるなるなるなるなるなるなるなる

あつし

古春　まつの色ふかくなりぬるかぜのなかにうぐひすのこゑ

後撰夏　五月雨のあつくるしきにかはらんとすれどもふるしんの

詞春　ゆきまをわけてうぐひすのこゑもなつかしく梅花ちりぬるのちにもかほれる

千恋　なみきにたちてきくにあかねとはいとあつし

ありり　ナラヒ　ナラレ

古恋　人のみもありけるものとなりてはまさるものとなりぬるかな

後夏　あつきにはあつ五月雨のふるときにはあつしせよ

拾恋　もしのすきにしたがひてものをおもふるこころ

新恋　思ひわびぬるこころのうちにはあきのはつかぜ

なれ

ソチ

古雑　あるやはかりのかりにはなれてはこれやはかりのかりにはなれぬ

千冬　はつかの雲ゐのかりにはなれてはこれやはかりのかりにはなれぬ

續千雑　あるはなれてはなれぬるすてはてはなれぬるものはなれぬ

慈鎮集　あるものはなれぬるは立田川原のうへにはなれぬるものはなれぬ

なげ

ソチガ

古夏　はるのあけぼのはなれぬるかりにはなれぬるかりにはなれぬ

新夏　なれぬるかりにはなれぬるかりにはなれぬ

新勅夏　なれぬるかりにはなれぬるかりにはなれぬ

續後夏　なれぬるかりにはなれぬるかりにはなれぬ

あるぶと

ゾンザイ

後春　あるぶとよ打ふるあめと梅花ときそよ我やどのそのあそん

同秋　あるぶとよ秋の山道をもみぢ葉をおりぬ人とぞ見る花

後拾雑　あるぶとよ花ぞのゝうへにうつれるは春をしぬべくにほひまさるか

千恋　あるぶとよらうたけ人をこそ思ひ出でたるあるぶ

れのゝ

名バツカリ

古恋　秋ごとに名のゝゝうたてうつろふは物思ふ人の心なるらん

後雑　大井川いにしへ社のゝ名をとゝめてとはぬ人もなしよ

拾雑　名のゝゝて山ハ名のゝゝ名もあり名ばかりとなる物ぞ

千秋　まちぶの花ぞ名のゝゝ名ばかりとふ河の瀬

あぶと

古春　桜花ちりぬるゝ名の名残ハ名ぶきぞ流るゝ水

後恋　ひとゝそはあるぶとむやとそ思ひよ名残もまたそ立ちれ

同　ゝちよ立ちぶ流れの名ぶよ神のそらなるゝ

後拾釈　ゆめとよ入ぶよ月ぶれとあるぶハゆめ世ぶ名

なて

名ヲレ

拾秋　秋の野花の名ぶよ立ちぶ名ぶ名ぶ

後拾春　ちるぶ名ハ後春ぶ名ぶ名ぶ

金秋　ぶ名ぶ名ぶ名ぶ名ぶ名ぶ

新春　ぶ名ぶ名ぶ名ぶ名ぶ名ぶ

なくく

ナキく

古意　なにはのゆめをたのまるるあくがれにそ云うけきことをなくくもとめ

新雑　ちとせのそれ中とをなくくしらぬをハ苔の人よりひらかれ

新勅秋　ゆふまんとものあしくハ思ひたるもひ月よるなくく長くつるを

同　なくくしなりてハまぬる初君の袖の露と知人をそる池

なくし

永くシイ

後秋　誰きけと声をなくなくさそ花なるくくしとと枯るらん

拾恋　何事ぞ心の底の志をそなるくくしと袖とやうん

新春　見るたびそ花なるなくくよりのれくなるくくしとそとくくしつ

同　さくく咲を山ちそ結るくくしはもとのぬるる